

「子ども食堂」訪問報告

神谷純子

帝京科学大学

A Report on Visit to Children's Cafeterias

Sumiko KAMITANI

キーワード：教職課程、子どもの貧困、子どもの育ち、社会関係資本、斜めの関係

I. はじめに

筆者が担当する本学の教職課程科目において、平成30年度、数名のグループで地域の児童福祉施設等を訪問する機会を設けた。本稿は、この取り組みのうち、特に食事の提供を伴う活動等の訪問に関する報告である。グループAが訪問した足立区の委託事業「アダチベース」は、学習支援を中心に子どもの居場所づくりを行い、併せて食事を提供している。また、グループBが訪問した「あだち子ども食堂」、グループCが訪問した「吉まぐれ屋」は、いわゆる「子ども食堂」として活動を展開している。

日本において喫緊の課題とされる「子どもの貧困」とは、相対的貧困、すなわち貧富の差が広がりつつある現状を指すものであり、必ずしも、命にかかわる飢餓状況を意味しない。しかし、経済的困窮のため十分な食事の量と質が確保できていない子どもも現実におり、日本で「子どもの貧困」対策と言うときには、こうした顕在化した貧困状況にある子どもへの支援がクローズアップされやすい。地域の子どもに無料か安価で食事を提供する場を意味する「子ども食堂」とは、平成25年の「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（以下、「子どもの貧困対策法」）の成立を機に急増し、「こども食堂安心・安全向上委員会」の調査^{*1}では、2018年現在で全国に2,286カ所が確認されている。代表の湯浅誠によると、地域交流の場として認知度が上がったことに加え、「子どもの見守りの場」として期待する自治体からの補助金が開設を後押ししていることが背景にある。

筆者は、教員免許状の取得をめざす教職課程の履修生を対象として今回の取り組みを実施した。しかし、参加した学生の大半が、子どもを支援するこうした地域での活動を「知らなかった」と記述している。それゆえに尚更、学校における教育者としての

児童との関わり方とは異なる点が目についたと思われる。本稿では、学生がこれらの活動を訪問後に記述したレポートをもとに、子ども支援の活動における支援者と子どもとの関係性に焦点をあてて学生の学びを考察する。

II. 訪問概要^{*2}

2.1 アダチベース（足立区）

足立区では、様々な理由により家庭での学習が困難な区内在住の中学生を対象に、平成27年度より「居場所を兼ねた学習支援事業」を展開している。グループAが訪問した「アダチベース」は、特定認定NPO法人カタリバが事業の委託を受けて展開する施設名であり、訪問当日は、事業の管理運営を担当する足立区福祉部くらしとしごとの相談センター（以下、相談センター）の職員及びアダチベースのスタッフのお二人にご対応いただいた。午後の早い時間帯に訪問したため、子どもたちはまだ来ていなかった。

学生は、訪問による学び・感想を次のように述べている。以下は、訪問後に提出されたレポートの抜粋である^{*3}。

- ・学習支援だけではなく、様々な楽しいイベントや、食事の提供など、そういった環境を作ることによって安心して勉強をすることができ、保護者や学校の先生など、生徒だけではなく周りの人々も助けているのだと感じました。今回子供にとって最も重要だと感じたのは、子供を見守る周りの支援する人がいる、ということなんだと思いました。(A1)
- ・学習塾であるが、食事を通じての生活習慣指導などにも力を入れている。生活指導もしているのは

驚いた。(A2*)

- ・学習塾だからといって、勉強だけではなく、食事やイベントなどを通して生活習慣やマナーを身に付けていくことも大切なことだと気付いた。(A3*)
- ・アダチベースでは、地域の方や企業の方など、様々な大人の支援がすごく子どもたちと関わっていた。その中でも、子ども一人ひとりにあった過ごし方ができ、そして、挑戦を後押ししてくる場所だという印象を受けた。学校だけでは味わえない、アダチベースだからこそ味わえることがたくさんあると思う。ほんとに、居場所という感じで第2の家みたいな、みんな家族って思うほど過ごしやすい。(A4*)

注：*印は卒業後に教員としての採用が決まっていることを意味する。

2.2 あだち子ども食堂（足立区東伊興）

【活動概要】

利用対象者は高校生までの子どもに加え、親や独居高齢者も含む。

料 金：子どもは無料、親や高齢者は300円

活動日：第2、4水曜日、17：00－19：00

場 所：東伊興住区センター

【活動の流れ】

15：00 スタッフ集合（7名程度）

15：30 調理開始

17：00 子どもたちが集まり始める

18：00 食事（～19：00解散）

19：00 片付け

19：30 スタッフ撤収

区内東伊興住区センターで活動しているあだち子ども食堂には、グループBの4名が訪問した。活動を見学したのち、代表者の長場美智代さんにお話を伺った。以下は、その要約である。

長場さんは、TVで子ども食堂のニュースを見て、ごはんも満足に食べられない子どもがいることに衝撃を受け、何もない状態で突発的に行動を起こした。知人や地域の方々に声をかけ、利用者の居住地区であり、調理室等の条件を満たしている東伊興住区センターに開設を決めた。行政などの後ろ盾がない状態で始め、場所の確保には苦労した。定期開催をめざして区役所と交渉を重ね、現在は、無料で住区センターを利用させてもらっている。個人や企業の寄付で活動が成り立っている。全国から寄付があ

り、この活動が社会に認知されてきたためだろうと話されていた。また、活動自体が、ホームページ作成や献立を考える栄養士など、「見えないスタッフ」に支えられているとのことである。

定員は20名で、利用者は1回につき子ども18名、保護者等を含めると25名程度で固定化してきている。他方、毎回1組は新規の利用者があり、地元の子ども食堂でママ友に会うのを嫌って区がウェブサイトに掲載している子ども食堂マップを手がかりに遠方からたずねてくることもある。

子どもたちには、シンプルな塩おむすびが人気である。一人で留守番をする子どももおり、大人と一緒に作るということが大切と考えている。献立は栄養士が作成してくれるときもあるが、寄付された食材から決めることもある。

子ども食堂を運営する上でのやりがいは、愛情をもって接すると子どもは変わると実感できること。また、様々な方からの寄付に、人の温かさが感じられ元気をもらうこと。また、毎回、食事の前後に保育士による読み聞かせの時間「子どもどくしょ」を設けている。この食堂の最終目標は学習支援であり、学習に対する意欲を高めることができるように、学生スタッフなど人員の確保のための働きかけを進めたいと話しておられた。

今後は、支援が必要な子どもへの周知活動を徹底したい。区内の小学校で全校児童にチラシの配布をしてもらいたい、なかなか許可が出ない。スクールソーシャルワーカーや他の子ども食堂とはつながりがあり、頻繁に情報交換を行っている。学校の先生方や教育委員会とも連携していきたいとのことであった。

学生は、訪問による学び・感想を次のように述べている。以下は、訪問後に提出されたレポートの抜粋である。

- ・改めて地域の方々との関わりが子供たちを育てていく上で非常に大切なことだと認識しました。貧困によって十分な食事を得ることが出来ない。親が共働きで孤食になってしまい寂しい思いをする。施設訪問を通して、この問題は地域の方々との関わりで手助け出来ると学びました。例えば手伝いを通して地域の大人と仲良くなり、食後は同世代の子と遊んだり、大学生に勉強を教えてもらったりすることです。そこから、健全な子どもの育成のみならず、子どもを中心として地域の活

性化も促進されます。こども食堂は、その地域との関わりの大事なツールの一つだと感じました。(B1)

- ・今まで自分は、子ども食堂を利用するのは、経済的に困窮している子どもだけなのかと勝手に解釈していた。しかし、話を聞いて、経済的に余裕があっても一人で食事をする子どもも対象であることも知ることができた。さらに独居高齢者もこの食堂の利用対象者であることも学べ、地域の方との繋がりを持てるのではないかと学んだ。今の子ども達に必要なのは、経済的な支援はもちろんだが、「様々な大人と関わる機会」なのではないか、と感じた。この食堂は、食事だけでなく出会いも提供しているのではないだろうかと感じた。(B2)
- ・休憩中も、こんだての話や子ども達の話で盛り上がっており、ボランティアの方は本当に子どもが好きなんだと感じた。共働き世帯や片親の子が多くなっている時代だからこそ、とてもいい施設だと思った。またボランティアの大学生や地域の方、食材を寄付してくれる方様々な人の温かさによって作られる料理は「真の愛情のこもった料理」であり、家でなかなか愛情をもらえない子どもにも「子ども食堂」を通して愛情を受け取ってもらいたいと心から感じた。(B3*)

注：*印は卒業後に教員としての採用が決まっていることを意味する。

2.3 吉まぐれ屋（荒川区南千住）

吉まぐれ屋は、2018年に若手の男性11名が立ち上げたNPO法人バイタル・プロジェクトのメンバーが経営する居酒屋である。「食べることは生きること」をコンセプトに、プロの料理人が本気で作る美味しいものを子どもたちに食べてもらい、「食」の大切さ、美味しいものを食べる喜びを知ってもらうことを目的としている。

【活動概要】

料 金：子どもはワンコイン（1円玉でも100円玉でも、本人なりに精一杯用意した額のコイン1枚）、大人300円

活動日：第1月曜日、16：30－20：00

場 所：居酒屋「吉まぐれ屋」（荒川区南千住）

【活動の流れ】

16：00 宿題等の学習タイム
18：00 食事
19：00 自由時間
20：00 子どもの見送り、スタッフミーティング

吉まぐれ屋へは、グループCの6名が訪問した。子どもたちがいる間は活動に参加して一緒に食事を取り、活動後のスタッフミーティングでお話を伺った。以下は、その要約である。

バイタル・プロジェクトは、荒川区子ども居場所づくり事業の助成を受け、あらかじめ子ども応援ネットワークに加盟して子どもの支援活動に携わっている。多彩な経歴を持つ若手の男性で構成されており、プロジェクトの代表はYouTuber、副代表は学童保育での運動指導や学校の運動部で指導員等を務めている。また、フラワーアレンジメントの講師や、法律事務所の秘書もいる。元々はスポーツを通じた仲間づくり、コミュニティづくりをめざしていた経緯があり、現在も、学習・食事・スポーツにおける支援を三本柱として活動している。スタッフが若手で子どもとの距離が近く、目線を合わせて関わりやすいことがこのプロジェクトの強みである。

子どもは登録制で、13名が登録しており（2018年現在）、日によるが5～10名が食堂を利用する。何らかの問題を抱えている家庭の子どもが多い。小学生から高校生まで幅広く受け入れているが、高校生がいる子ども食堂は多くはないようだ。子どもがひとりで来たり、母親が小さな子どもを連れて一緒に来るのがよくあり、ときには、中学生が塾に行く前に寄って腹ごしらえをして行ったり、まれに偶然店の前を通った通行人が店内を覗いて、ついでにごはんを食べて行ったこともある。食堂を利用するのは、大半が近隣の住民である。個人情報問題があり、学校には積極的に働きかけてはいない。他方、珍しいケースではあるが、小学校の教員が自分の担任する低学年の児童の受入れを依頼してきたこともある。

社会的に支援が必要な子どもを中心に受け入れており、けがや事故の危険もあるため目が離せない。そのため常に手が足りず、思うような援助ができないことが課題である。

学生は、訪問による学び・感想を次のように述べている。以下は、訪問後に提出されたレポートの抜粋である。

- ・吉まぐれ屋に来ている子ども達は皆人懐っこいというイメージであった。本当にこの子達はなにかしらの事情があるかというほど、ごく普通の子どもたちにしか見えなかった。ただ職員の方々も子どもにもしっかり注意している姿をしていた。担任

でもなく、親じゃなくてももしっかり指導しているからこそ子どもとの距離が近く人気があるのかなと思った。ここに来る子ども達はそれぞれ違う小学校からきているため新たな仲間が出来るというメリットもある。自分が一番いいと思ったのは学校と違い、敬語を使わないところだと思った。敬語を使うよりか普通に話した方がこどもたちや職員の方々も気をつかわなく、逆に距離が縮むのではないかとおもった。もちろん名前を呼ぶときはさん付けをする。子ども達にとってこの子ども食堂はとても過ごしやすい環境ではないかと思う。今の子どもたちは動画などで過ごしている中でこのようなこども食堂で人と触れ合うことが大事ではないかと思う。(C1*)

- ・一見なんにも感じないが家庭での事情等で様々な悩みを抱えていると感じた。人懐っこい子が多くたくさんコミュニケーションをとることが出来た。このように学校・家庭以外で大人とかかわりのびのびと生活できる場所はとても大切だと感じた。(C2)
- ・この訪問で1番感じたことは子どもの人数に対する大人の人数の少なさであった。訪問当日は私たち大学生が5人訪問して大人の目が行き通っていたが、普段の大人の人数では人手が足りないとおっしゃっていた。実際このような施設のボランティアに取り組んでいる人達が少ないのではないかと感じたと共にもっとこのような施設を知っていきもっと携われる機会を増やしていきたいと感じた。(C3)
- ・今回の訪問から、普段私達が思っている以上に片親やネグレクトなどの社会的補助が必要な子ども達が沢山いることがわかり、私達のような若い世代の人たちが子ども達と同じ目線に立って接していくことがこれからは大切であるということを学んだ。大人と子どもが同じ目線になることでさらに子ども達の考えや気持ちが理解できるようになり、そうすることで、ちょっとした言葉かけや子どもの行動に対する対応の仕方が変わってくると感じた。また一緒に楽しく過ごすことも大切だが、怪我などを防ぐために叱ることも大切であることも改めて感じた。自分一人の行いのせいで他の子ども達が怪我をしまったり迷惑をかけてしまうということを自覚させることも、大人としての役目であることを改めて実感した。吉まぐれ屋のスタッフの皆さんは子ども達をととても温かい目で見ている、仲良くしていたがその反面、常に

よく子どもを注意して見ているなと感じた。吉まぐれ屋の2階に続く階段付近では特によく見ているなと感じた。私達も楽しく過ごしている中でも常に様々なことに目を向けていなければならないと感じた。子ども達はとても楽しそうに過ごしていて、初めて来て誰なのか顔も名前もわからない私達の事をよく受け入れてくれ、積極的に一緒に遊んでくれたり、食事をしてくれてとても嬉しく感じた。それと同時に、このように子ども達が伸び伸びと遊べる環境づくりや、人員を増やしていくことがこれから大切になってくると感じた。私達だけでなく様々な大人が社会的補助の必要な子ども達について考えることが必要だとも感じた。(C4)

- ・吉まぐれ屋を訪問する前は、子ども食堂＝貧困というイメージが強く暗い印象を持っていましたが体験後は、スタッフも明るく私達を受け入れ、丁寧な対応で接してくれました。そんな優しい方たちから支援を受けている子どもたちは幸せそうな顔をしており、どこに不自由なところがあるのか不思議なくらいでした。しかしどんな境遇の子がいるのか質問すると、片親の子やネグレクト、発達障害の子もいて、本当は子ども1人に対し、大人1人で対応をしなければ十分に経営がまわらないそうです。今回は私達6人がボランティアに行かせて頂いたので助かったと感謝してくれました。このように課題はありますが地域の方達の協力のおかげで子ども食堂は成り立っているように感じました。児童と話している中で「やっぱりみんなで遊んだり、一緒にご飯を食べることが楽しい。」という声が一番多かったです。子ども食堂は「孤立している人たち」をくっつけてあげる。孤独な人たちの不安要素をちょっと取り除くことに意味があるのだと感じました。子どもたちにお金をあげるわけでもなく、また来週おいでと声をかけるだけでいい。「なんにしてもあげられないけれど一緒に御飯を食べようよ」という活動がとても大切だなと思いました。(C5)

注：*印は卒業後に教員としての採用が決まっていることを意味する。

Ⅲ. 考察～記述に見られる学生の学び

3.1 「支援」に対する認識の変化

教職課程を履修しているにもかかわらず、大半の学生が、今回訪問したような、子どもを支援する地域の活動の存在を「知らなかった」と記述してい

る。学校教育に対する社会の期待が肥大化する中で、学校教員が果たすべき責務は増える一方、学校外で子どもが育つ環境についての関心や議論は、社会においても学校教員にも不足気味である。

学校教員にとって子どもの支援とは、集団での学習や活動に困難を抱える子どもの補助であり、ニーズの補完である。それゆえ、諸活動を訪問する前の学生のイメージでは、アダチベースは学習を補助する「学習塾」(A2＊、A3＊)であり、子ども食堂は、十分に食事をとることができない子どもが空腹を満たせる場であったことが、学生の記述の随所に読み取れる。これに対して、本報告の諸活動がめざしているのは、アダチベースの「居場所」というキーワードに特徴的に見られるように、包括的な子どもの育ち・育ての場、「第2の家」(A4＊)としての取組みであり、「地域との関わり方のツール」(B1)である。訪問により、学校外でも家族以外の多くのおとなが関わって地域の子どもの育ちを支えようとしていると知ったことが、学生にとって大きな学びのひとつであったと言える。各々の活動の場では、食事や安心安全な居場所が提供され、時間を共有できる他者がいる。この場で他者と関わり、様々な体験・経験を積むことにより、子どもに豊かな育ちを提供しようと試みているのである。貧困支援におけるいわゆる「学習支援」は、支援のひとつの側面に過ぎない。学校外における子どもの支援活動に対する学校教育の補完という程度の幅の狭い支援のイメージが、今回の訪問によって、より広い視野から子どもの育ちをとらえ、考えるようになったことが、以下のような学生の記述からうかがえる*4。

- ・子供にとって最も重要だと感じたのは、子供を見守る周りの支援する人がいる、ということなんだと思いました。(A1)
- ・改めて地域の方々との関わりが子供たちを育てていく上で非常に大切なことだと認識しました。(B1)
- ・今の子ども達に必要なのは、経済的な支援はもちろんだが、「様々な大人と関わる機会」なのではないか、と感じた。(B2)
- ・ボランティアの大学生や地域の方、食材を寄付してくれる方々様々な人の温かさによって作られる料理は「真の愛情のこもった料理」(後略)(B3＊)
- ・今の子どもたちは(中略)このようなこども食堂で人と触れ合うことが大事ではないかと思う。(C1＊)

- ・学校・家庭以外で大人とかかわりのびのびと生活できる場所はとても大切だと感じた。(C2)
- ・子どもたちに(中略)また来週おいでと声をかけるだけでいい。「なにもしてあげられないけれど一緒に御飯を食べようよ」という活動がとても大切だなと思いました。(C5)

3.2 子どもとの関係性の見直し

アダチベースには、スタッフ以外にも、地域の大人や大学生がよく出入りしている。学校の先生でも親(「タテの関係」)でもなく、友達(「ヨコの関係」)でもない、子どもたちにとって一歩先を行く先輩としての関係は「ナナメの関係」*5と称されている。また、あだち子ども食堂のホームページにも、活動のひとつとして「地域の方との交流による斜めの関係」を築くことがあげられている。普段、学校教育において、「タテの関係」で子どもとかかわるよう徹底されてきた学生にとって、気づきの多いポイントだったようだ。

アダチベースを運営するNPO法人カタリバでは、「ナナメの関係」を指導する、される関係にないことと定義し、この関係において、子どもたちは安心して本音を語り、ありのままの自分であることができるとする。この意味で言えば、あだち子ども食堂の、「休憩中も、こんだての話や子ども達の話で盛り上がりあっており」「本当に子どもが好き」(B3＊)な比較的年配の女性スタッフも、子どもにとって「ナナメの関係」にあると言えるであろう。アダチベースで行われる様々な注意やしつけを「食事を通じての生活習慣指導」「生活指導」(A2＊)と表現するのは、学生が学校教師として「指導する」「タテの関係」を内面化しているためと理解できる。訪問が午後の早い時間帯で、スタッフと子どもの「ナナメの」関わりを直に見ることができなかったのも一因と言えるだろう。

一方で、吉まぐれ屋で比較的若手のスタッフと子どもたちとの関わりを目の当たりにした学生の中には、「ナナメの関係」にあっても「指導」はできるし、しなければならないと感じた者もいた。

- ・担任でもなく、親じゃなくてもしっかり指導しているからこそ子どもとの距離が近く人気があるのかなと思った。(中略)自分が一番いいと思ったのは学校と違い、敬語を使わないところだと思った。敬語を使うよりか普通に話した方がこどもたちや職員の方々も気をつかわなく、逆に距離が縮

むのではないかとおもった。(C1＊)

- ・自分一人の行いのせいで他の子ども達が怪我をしてしまったり迷惑をかけてしまうということを自覚させることも、大人としての役目であることを改めて実感した。吉まぐれ屋のスタッフの皆さんは子ども達をととても温かい目で見ている、仲良くしていたがその反面、常によく子どもを注意して見ているなと感じた。(C4)

教育という営みを広義でとらえると、子育てにおいて教師、親以外のおとなは子どもに何らかの教育的「指導」を行っているし、行う必要があると言える。何が「タテの関係」「ナナメの関係」を規定するのか、また「タテ」「ナナメ」の関係にあるからこそできる、できない「指導」とは何か。この点を明らかにすることで、学校・学校教員と学校外の子育てを支援する諸活動の役割の違いが明確になるに違いない。

IV. まとめと今後の課題

今回「子ども食堂」など子どもに食事を提供する支援活動を訪問したことにより、学生は、学校教育における学習や活動の補完という狭い意味での支援ではなく、子どもの育ちを支える幅広い働きかけを学ぶに至った。こうした学外の支援活動におけるおとなと、学校教育における教員では、子どもとの関わりが異なり、何がどのように異なるかを明確にすることにより学校教員に期待される役割も明確になると思われる。この支援者と子どもとの関係性と、それに伴う支援のあり方の違いについては、別稿に譲ることにしたい。

謝辞

本学学生にご対応いただき、貴重な学びの機会を与えてくださった足立区福祉部くらしとしごとの相談センター職員及びアダチベースのスタッフの皆様、あだち子ども食堂の長場美智代代表及び関係者

の皆様、子ども食堂「吉まぐれ屋」スタッフの皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

【注】

1. 「広がる「子ども食堂」、全国2,286カ所2年で7倍超」朝日新聞デジタル 2018年4月4日付 <https://www.asahi.com/articles/ASL43573TL43UTFK010.html> (2019.5.24閲覧)
2. 各活動の訪問概要は、複数の学生の記述を照らし合わせて要約したものである。
3. 学生の記述の引用においては、学生の了解のもと、個人情報に配慮して数字等により別個の学生を識別するに留める。また、明らかなタイプミス及び事実の誤認を除き、原文に加筆修正なく記載している。
4. このような子どもの支援活動における人的資源を志水は社会関係資本と称し、子どもの貧困対策の鍵ととらえている¹⁾。阿部も、社会関係資本に着目した貧困支援として、ビッグブラザー・ビッグシスターとの関係づくりを重視した米国のメンタープログラムを紹介している²⁾。
5. 「ナナメの関係」とは、子どもに係るボランティアにおいてしばしば聞かれる関係性の概念であり、笠原嘉『青年期：精神病理学から』（中公新書、1977年）において笠原が示した「斜めの関係」に依拠するものと考えられる。特定認定NPO法人カタリバでは、社会関係資本を子どもの貧困対策の鍵ととらえており、「ナナメの関係」にある人たちはそのエイジェントと位置付けられている。

参考文献

1. 志水宏吉：「つながり格差」が学力格差を生む，亜紀書房，2014.
2. 阿部彩：子どもの貧困Ⅱ：解決策を考える，岩波新書，2014.